

釣りに釣られて

高原英夫

## 第十五回 「バケツ三杯の鮎」

夏休みともなればランニングシャツに半ズボン、靴は、中に水が入ればズルズル滑り、いつか親指が突き破って出そうなゴム製の短靴を履いて遊び回っている、そんな小学生だった。

遊びといえばパッタ（メンコ）、鬼ごっこ、陣取り合戦などなど、私達の年代であれば誰でもわかる共通のものに違いない。しかし私は、パッタは青森県の三戸町のもので、また一集落の遊びとばかり信じていた。テレビは六年生の頃には見ていたが、メンコをやっている場面などは映るはずもなく、映らないものは無いものと思うしかなかったと言った方がいいのかも知れない。考えてみれば、パッタには印刷された絵柄があったのだし、同じようにビー玉にしろ東京のどこかでつくられたものが青森の片田舎まで来ているのだから、余所でもそれを道具として遊んでいるんだと気がつきそうなものだが、とてもそこまで頭が回るような子供ではなかった。

それが、勤め先の東京で、他県出身の人たちと飲んだ時に、そんな時代の話にな

り、遊び方といい、子供ながらの心の揺れといい、あまりに似た互いの経験の吐露に、ハラリとどこか思い出のひとひらが役割を果たして落ちていくのを感じたことがある。

してみれば、釣りも同じことだったに違いない。もつとも生まれた所は全くの内陸のど真ん中で、海など小学の四年生の頃に初めて見たようなもので、カニをとったり、アメフラシの吐く液体の美しさに驚いているほどのことで、当然海釣りなど論外のことだ。竿は山で切ってきた竹に、セットで売っていたテグスに丸い浮木。そして小さなカミツブシになっていたかと思うが、オモリがなければ板状になった鉛を適当に切って使い、沼ではミミズ、川ではトウモロコシの粒の中の少し固い部分を針にかけ釣っていた。

私の家の山手に向かうと農用水用に大堤、小堤とその名のとおりの大小ふたつの堤があり、そこへはフナ釣りに出かけた。下手には馬淵川が流れていて、川幅は広く、子供の犬かき泳ぎでは向こう岸まで休まず泳ぎ通すのはそうそうできるものではなかった。馬淵川では当時「ヌマヘ」「ギンギョ」が釣れた。たいして美味しい

というものでもなく、出かける時の意気込みはそれなりなのだが、持つて帰つても喜ばれるでもなく、二〜三匹釣ればバケツに入れた「ヌマヘ」は行き所がなく、ただパクパクしているだけで、カッコよくいえば、後でリリースされた。改めて記憶をたどりながら「ヌマヘ」を凶鑑で調べてみたが、「アブラハヤ」というのが本当の名らしいのだが、その色から「クソバエ」ともいわれているという。なんともよくつけたものだ。一方「ギンギョ」は雄の婚姻色など、どうみても「オイカワ」に見えるのだが、その分布のところを読むと関東以南、朝鮮、台湾となるとハタと止つてしまう。ここは関東以北青森だ。これはあえて調べておかない。今、四才の孫が釣りに興味を持つようになったら一緒に釣りに行き、その名前を調べてやろうと思つている。

秋のある日のことだ。シベリアに抑留され生きて還り、小さな雑貨店を開きながら、一日中で南部せんべいを焼いていて、私達と遊びなどしてくれたことのないオヤジが

「オギヤ（ウグイ）を釣りにいぐ、ついて来い」

というのだ。秋祭りと、盆の墓参りくらいしか一緒に出かけたことがない私にとつては、キョトンとしていた所だがその間もなくどんな用意をするのかに関心が移った。物干し竿にでもなるうかという唐竹に、ガラガケ針を何本かつけ、下にはオモリをぶら下げた。いたって簡単といえは簡単で、無骨で、何の銜もない道具そのものだ。あとは竿にくるくると巻きつけ、スタスタと釣り場へと向つた。

釣り場というのは、歩いて十五分ほどの、近くにある小さな水力発電所である。上流の当時の岩手県金田一村からトンネルを掘り、それが近くの舌崎という場所に出て、一旦貯水池に溜められ、それを落とし、下流となった川との高低差でタービンを回すというわけなのだが、その貯水池にウジャウジャと「オギヤ」がいると誰からか聞いたらしいのだった。オヤジなりに小さな頃の釣りの思い出の導火線にいきなり火が着いたのだろうか。

何人もの人が集まって釣っていた。貯水池の中を回転する水流に竿を出し、ひたすらグイッと上げては下げ、上げては下げてを繰り返すのである。私にもやれと時折渡されるのだが竿が重く、ましてや重々しく激しい水流に足が竦む思いがして、

少しやっただけですぐに返した。二時間もやっただろうか。ウジャウジャいるという話の割ではないがそれでも数匹は上げた。オヤジは自分でさばいたのだが、ナタで骨もろともたたきだした。私は、近くに山椒を植えている家があるから、そこでいくらか貰って来いといわれ、すぐその場から走り出していた。ウグイは素焼きにしておいて、出汁にするのが一番だとかは、余程あとになって知った話だし、溪流釣りをしている、これはと思つてかけると水中で銀色にひかるだけで、ああとあと思つうほどの外道なのだが、その時はもう嬉しくて仕方がなかった。

何百回たたいたのか知らないがミンチにし、ピンポン玉よりは少し小さく丸めて鍋に放ち、その日の夕食になった。ただ味は思い出せない。少し骨が残り、そんなことだけが脳の奥に仕舞い込まれてしまった様なのだ。何にしてもオヤジと釣りをしたのはこの一回きりで、味よりも何よりも体験自体がウグイの味になってしまっている。

その後、早くにオヤジは亡くなり、とつくに私はオヤジの年齢を越えた。

同じ発電所での話である。これは私が高校生の頃のことだ。ちようどアユの解禁

となり川のそちこちに釣り師が長い竿を並べていた頃だった。そんな道具もない私は、小学生の頃のように弟と発電所の下の川に糸を垂らしていた。脇には上の貯水池から余った水が流れ落ちる四く五メートルの幅の用水路があり、その日は勢いもなくサラサラと水音を立てていた。ところが、何か飛び跳ねて上へ登ろうとする魚が見える。よく見るとアユに違いなかった。ただ私と弟にはそれを獲る術が思い浮かばなかった。というより、ひとつの風景としてアユが遡上していく姿を見ていたのだった。アユにとつて用水路の勾配はあまりに急すぎて、しかも長く、ほんの二く三メートルの所までは跳ねるものの、また下に落ちていった。

さてここからである。郵便局の配達員がやってきてその様子を少しながめていたが、次に発電所に行きもう一人を連れて、竹箒と弓の型をした網、カッツクリを持ってきたかと思うと、川辺まで降り立った。ひとりは下でそのカッツクリを構え、もう一人は用水路をやつとの思いで数メートル登り、そこで箒を左右に大きく振り始めたのである。ほんの数分のことだった。破れんばかりの網の中には満々とアユが入っていた。バケツに三杯はあつた。

私は下で行われている漁を、あんぐりと口を開けて見ているしかなかった。しかし「なるほど」とすぐに翌日何をすればよいかがあった。

家へ帰るなり網と箒とバケツを用意した。あとは夜が明け、時間でいえば十一時頃だったと思うからその頃に行けばいいだけだ。さあ翌日、二人で発電所に向った。川辺まで降りた。ところがそのアユがさつぱり跳ねている様子がない。不安というほどでもないがどうも違うなという気配が二人にはわかった。それでも弟は下で網を持ち、昨日の郵便局の配達員のように私は上へ登った。さあ、アユよ網へ入れと箒を払った。

弟はゆつくり網を上げて見た。思った通りというか、ガツカリというか、何と二匹入っていただけ。何という漁の違いだ。しかし入っただけでも良かった。その時のアユが二人でオヤジに上げたたった一度の魚となってしまった。毎日晩酌をしていたオヤジだったが、その日の「アユの味」の話は聞いていない。しかし特別にうまくいったらとうと確信している。

今でも盆になれば帰り、発電所のあたりに必ず立ち寄ってみる。



その後、一度も網を出してやってみたことはないが、豊かな川の恵みとオヤジと  
の思い出が、おだやかなひとつとなつて流れていくのが見えてくるのである。

平成23年7月